

國學院大學学術情報リポジトリ

ジョン・デューイの欧州大戦

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荻田, 真司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001107

ジョン・デューイの欧州大戦

菊田真司

1 問題設定

欧州大戦の開戦は、アメリカ合衆国においても、さまざまな反応を呼び起こした。少なくとも開戦当初からは戦争に巻き込まれることなく、地理的にも外部にあつて中立を保つことのできたアメリカは、西洋文明に属しながら欧州大戦を外から観察することができるとの特権的な地位を有していた。したがって、アメリカ合衆国における欧州大戦をめぐる議論は、戦争の原因やその帰趨をめぐる表層的な分析を越えて、ヨーロッパ文明に対する評価、アメリカが西洋文明において持つ意味、ヨーロッパの民族問題とアメリカの関係など、多岐に渡るより深刻な考察を生み出したのである。⁽¹⁾

こうした欧州大戦をめぐる議論の中で注目を集めた事態の一つは、一九世紀末から二〇世紀初頭の革新主義運動に積極的に関与した知識人グループが、欧州大戦に対する合衆国の参戦を積極的に主張するグループと参戦にあく

までも反対するグループとに分裂したことである。とりわけ、『ニュー・リパブリック』誌を中心に展開された参戦論は、その主要な論者が革新主義の理論的リーダーであったこともあって、大きな衝撃をアメリカのリベラル派知識人にもたらした。その結果、二〇世紀初頭までに形成されていた革新主義的な知識人グループは、この参戦問題をめぐって対立していくことになる。⁽²⁾

この『ニュー・リパブリック』誌上で活発に議論を繰り広げた知識人の一人として、ジョン・デューイの名をあげることができる。デューイは、教育学における革新的な理論だけでなく、新しい時代の哲学としてのプラグマティズムを主唱することによって、リベラル派知識人の中で重要な位置を占めつつあった。⁽³⁾ また、シカゴ大学時代に培った、ジェーン・アダムズをはじめとする改良主義的な社会運動家や知識人との関係に加えて、コロンビア大学に転じた後のニューヨークの若い改革派知識人たちとのかかわりの中で、社会改革をめぐる「世代を超えた連合」を形成していた。そのデューイが、初めて大きな社会的な注目を浴びようになったのがこの欧州大戦参戦論であるが、そこでのデューイの積極的なアメリカの参戦擁護論は、多くの革新主義的知識人を困惑させた。⁽⁵⁾ その代表的な議論は、デューイのプラグマティズムの熱烈な信奉者の一人であったランドルフ・ボーンによるデューイを批判する一連の論考である。⁽⁶⁾ 参戦問題をめぐるデューイの判断の誤りを批判すると同時に、その誤りが手段の正当化は可能であるけれども、目的の選択を行うことができないというプラグマティズムそのものの持つ欠陥に由来すると指摘するボーンの議論は、いまだにこの問題をめぐるデューイ評価に大きな影を落としている。また、この時期におけるデューイのアメリカ参戦問題に関する議論は、デューイに同情的な論者の間でも、デューイの哲学的な貢献とは無縁のものとして評価されることが多い。⁽⁸⁾

しかし、デューイの参戦論は、強まるナショナリズム的な感情と反ドイツ感情というアメリカ国内の状況に迎合

したものではない。むしろ、デューイは、戦争に対するアメリカ国民の偏狭なナショナリズム感情の高まりに対しては一貫して批判的である。また、デューイは単純な全面参戦論に与していたわけでもない。他方で、デューイの議論の大きな特徴は、『ニュー・リパブリック』誌の他の論者のような国際政治的な側面からではなく、「哲学」的な側面からアメリカの参戦を正当化する点にある。本稿では、参戦問題をめぐるデューイの議論の「哲学」的側面に着目し、こうしたデューイの見解が、欧州大戦への参戦問題を議論するためにアド・ホックに案出されたものではなく、むしろコロンビア大学に拠点を移して以降のデューイの理論的な展開の必然的な帰結として評価すべき面があることを検証する。

2 『ニュー・リパブリック』誌とデューイの「参戦」論

ハーバート・クロウリーによって一九一四年に創刊された『ニュー・リパブリック』誌は、欧州大戦が開戦するやいなや「戦時リベラル」(war liberal)⁽⁶⁾の拠点となった。『ニュー・リパブリック』誌は、クロウリーに加えて、ウォルター・リップマンとウォルター・ワイルを共同編集者として、革新主義的な言論活動を活発に繰り広げた。クロウリーは、一九〇七年に発表した『アメリカ生活の約束』以来、内政・外交の両面に渡る革新主義的な政策の支持者であり、政治的にはセオドア・ルーズベルトに近い位置にあった。また、リップマンは、一九一四年の『変動と支配』において、民主主義的な実践における方法論としての「科学」の重要性を強調し、革新主義の理論的な支柱となりつつあった。しかし、一九一二年の大統領選挙における革新党の敗北後、彼らの論調は、徐々にウィルソン大統領の政策に対して接近していく。とりわけ外交政策の面では、既に『アメリカ生活の約束』の中で、クロ

ーリーが、アメリカの孤立主義の時代が終焉することを予告し、ヨーロッパの政治情勢に対するアメリカの役割を強調する議論を展開していたこともあり、その距離は急速に接近していった。一九一六年の大統領選挙で、公式にウィルソン大統領に対する支持を表明した同誌における以後の論調は、ウィルソン政権の意向を反映したものとして受け止められるようになった。実際に、クローリーやリップマンは、一九一七年初頭までにはウィルソン大統領の外交政策のアドバイザーであったハウス大佐との定期的な会合の機会を持つようになっていたし、また、リップマンはより直接的にウィルソン政権の中枢に参加し、欧州大戦の戦後処理を含むその外交政策の形成に大きな役割を果たすことになったのは周知の通りである。

しかし、『ニュー・リパブリック』誌の論調は、単なる孤立主義の放棄と旧世界の戦争に対する全面的な介入を主張するものではなかった。外交問題に関する『ニュー・リパブリック』誌の基本的な論調を転換したとされる一九一五年のノーマン・エンジェルの論考⁽¹⁰⁾では、確かに伝統的なアメリカのヨーロッパ政策であった中立主義がもはや時代遅れになったことが認められているものの、同盟側あるいは協商側に立つての全面的な戦争参加には否定的であり、むしろ戦争の目的に応じた限定的な戦争参加が主張され、実際の戦闘に参加するだけでなく、禁輸政策などの間接的な政策的選択肢も視野に入れられていた。以後、欧州大陸での戦況の変動によって、実際にとるべき手段として具体的にどのようなものを考えるかという点では変動はあるものの、アメリカ独自の戦争目的の設定と、それに応じた手段の選択の必要性を説くという点では、『ニュー・リパブリック』誌の編集方針は一貫していた。⁽¹¹⁾

一九一七年夏の段階に至るまで、『ニュー・リパブリック』誌は、限定戦争論、あるいは、消極的参戦論という立場をとり続けたのである。

こうした『ニュー・リパブリック』誌の抑制的な立場に、デューイのプラグマティズムの影響を見ることは不可

能ではない。実際デューイの議論は、一方で手段としての軍事力の行使に関する合理的な熟慮の必要性を強調するとともに、そうした熟慮の結果としての軍事力の行使に関しては是認されるものととらえていた。⁽¹²⁾ ある特定の目的に対する具体的な手段の有用性を判断することがプラグマティズムの根本的な着想であるとすれば、このデューイの軍事力の行使に関する議論は、プラグマティズムの方法論に即したものであり、プラグマティズムの応用ともいふべき性格を持っている。⁽¹³⁾ したがって、デューイも他の『ニュー・リパブリック』誌の論者と同様戦争はあくまでも目的に対する手段であるという点を強調し、戦争あるいは平和の絶対化を一貫して否定する。平和といえども、それ自体は目的ではなく、したがって、場合によっては放棄することが可能であるはずなのである。デューイが、平和主義者に対して行つた批判の多くは、こうした目的の絶対視という誤謬に平和主義者も陥っているといふものであった。逆に、アメリカのナショナリズムと反ドイツ感情が沸騰し、民主的な自由が危険にさらされる事態を招くと、デューイはこうしたアメリカ国内の状況に対して、明確に批判的な態度をとることになる。参戦問題をめぐる国内の対立が激化するにつれて、様々な形で表面化した平和主義者に対する社会的不寛容に対するデューイの否定的な姿勢は終始一貫していた。それは、「プロイセン主義を国外で打倒するという目的のために、国内にそれを樹立すること」に他ならないからである。アメリカの参戦に対する積極的な姿勢の一方でデューイが行つた様々な市民的自由を守る活動、アメリカ市民的自由連合（American Civil Liberty Union）のリーダーとしての活動やコロンビア大学の忠誠審査委員会による平和主義的な教員の解雇に反対する活動などは、こうした文脈においてとらえることができる。⁽¹⁵⁾

それでは、デューイが欧州大戦の目的と考えたものは何であつたのであろうか。デューイは、アメリカが参戦する場合の戦争目的について、必ずしも明確な議論をしているわけではない。しかし、多くの場合、次の二つのい

れかを最終的な目標として取り上げているように思われる。一つは、「デモクラシー」の維持ないしは拡大である。もう一つは、「アメリカ的な価値観や文化」の拡大である。つまり、デューイの戦争目的は、現実の国際政治上の勢力均衡ではなく、より文化的・思想的なものであったということができよう。⁽¹⁶⁾ その反面として、デューイの参戦論を他の論者の議論と区別するのは、ドイツに対する厳しい文化的な批判、より正確には、ドイツの国家絶対主義とその背景をなすドイツ哲学に対する明確な否定的な態度である。次節では、その内容をやや詳しく見ていくことにしよう。

3 デューイのドイツ文化批判

デューイは、一九一五年二月にノース・キャロライナ大学で行った三回の連続講演を元に、『ドイツ哲学と政治』⁽¹⁷⁾と題された著作を出版した。参戦の是非をめぐる論争が激しさを増しつつあった時期に出版されたこの著作は、戦争目的に関するデューイの立場を比較的明確に示すものであるとともに、それが前述したデューイの参戦論の特徴である、ドイツ批判の要素と体系的に結びつけられている点で、注目に値する。

この著作の中で、デューイは、カント以来のドイツ哲学の歴史をたどり、それが国家に対する全面的な服従的態度を導く過程を論じている。デューイによれば、カントは、自然の世界と精神の世界の二元論を持ち込むことで、倫理的な問題を経験的な事象や方法から切り離れた。その結果生じたのは、倫理問題に関する定言命法という、目的を欠いた空疎な定式化である。こうして生まれた倫理的な行動の目的に関する空隙を国家が領有することによって、絶対的な国家帰依が生み出されることになる。カントが生み出した哲学的な絶対主義は、その原則に対する経

験的な事象からの批判を拒否することで、政治的な絶対主義につながっていくのである。こうして、固定的なカテゴリーによって形成された哲学は、固定的な階層構造に対応する社会哲学を生み出す。こうして、カントの哲学は、政治的な絶対主義とその元にある固定的な階層的社会構造を正当化する社会哲学を生み出したのである。デューイは、カント自身の政治的信条が、個人主義的でコスモポリタンのものであったことは承認するが、こうしたカントの個人的な信条は、彼の哲学にその基礎を持つておらず、したがってその哲学の帰結に何ら影響を与えていないことを指摘する。しかし、デューイにとってより重要なのは、カント自身の政治哲学の問題ではなく、カントの哲学が生み出したドイツ的な社会哲学の可能性が、その後たどった歴史的な経路である。⁽¹⁸⁾

デューイによれば、カントによって生み出された空虚な形式は、ヘーゲルによってその実質的な内容を与えられた。歴史の運動を体系的に合理化することによって、ヘーゲルは国家を倫理的存在の源泉として神聖化した。そこでは、個人は、国家の秩序に同化することによってのみ、合理的に、したがって、自由になることができるのである。ここでは、国家が倫理的な命令の源泉の地位を独占した結果、愛国心が宗教的次元にまで高められている。しかし、ヘーゲルは、単に国家を絶対的な信仰の対象に転化しただけではない。デューイは、「ヘーゲルほど闘争と勝利という用語で思考した哲学者はいない」ことを指摘する。ここでは、戦争が国民の精神的な健全性と活力を測るものとしてとらえられる。国家に対する宗教的な帰依のエネルギーは、闘争のメタファーを通じて外部へと向けられる。倫理的な源泉としての国家に対する服従は、闘争のただ中にある国家に対する服従となり、それは、現実の軍隊における従順さを、服従の理念型と見なす態度につながる。⁽¹⁹⁾

こうしたドイツの社会哲学の延長線上に、哲学と政治の連続性というドイツ的な思考が存在すると、デューイは考える。それを例証するために、デューイが取り上げるのは、フレデリック・フォン・ベルンハルディの議論であ

る。ベルンハルディは、あらゆる国際協調的な觀念が「ユートピアの誤謬」に立脚していると主張する。ユートピアは、生の至高の原則である闘争を排除しているからである。最終的な決定者は世界史であり、ドイツの戦争は、物質的な目的のためだけに戦われるのではなく、最高の精神的な原則のために戦われなくてはならないのである。戦時に要求される自己犠牲は、有限な存在の自己利益の虚しさを示し、私的な目的を集団的な大義に組み込むことで、個々人の最高の潜勢力を発現させることにつながる。戦争は残酷であるけれども、それはより高い理想の実現のために甘受しなければならない犠牲である。このように論じるベルンハルディを、デューイは、盲目の理想主義を軍事的な技術論に結びつけるドイツ文化の傾向の戯画として描き出すのである。

他方でデューイはアングロ・フランス的な経験論に対しても批判を加えている。それは効用に関する利己的な教義に基づくものであり、そこから生み出される原子論的な自由放任主義の哲学は、個人の幸福実現のために国家が果たすべき積極的な役割を排除してしまう。とりわけ、デューイは、ドイツの觀念論的な哲学と同様に、イギリスの経験主義哲学をその国民性を形成するものとして取り上げる。そして、イギリスの経験主義は、前例に基づく判断という意味で歴史的経験主義であり、過去の規則を繰り返す態度しか生み出さないと断じる。また、イギリスの教育の中心が、文学と人文学であり、人間の現実的な諸問題から切り離された余暇的な追求としての教育という古典的な観点を引き継いでいるだけでなく、こうした人文主義的な教育が、教養主義という形で階級社会を補強する役割を果たしていると指摘する。こうしたイギリスの哲学と教育の傾向は、科学的な訓練と組織の不足を生み出す。デューイは、人文主義的な文化がアメリカでも依然として大きな力を持っていることを指摘し、それが科学的な方法についての包括的な訓練と結合されなくてはならないと主張する。アメリカがドイツの効率的な社会秩序から学ぶことができるのは、こうした「科学」的な方法に関する訓練である。しかし、ドイツとは異なり、そうした

方法は単に軍事的な必要を実現する技術ではなく、他の目的を達成する際にも有効なのである。⁽²⁰⁾

こうして、「科学」的な方法に関する訓練の重要性を論じたデューイは、この著作の末尾においてこの戦争の目的について論じている。デューイによれば、アメリカは、地理的偶然によって孤立的な国家主権を承認し、歴史的偶然から民族的・人種的に混血的で国際的な特徴を持っている。したがって、こうした経験的事実を、アメリカ内外の政策理念に転化させる必要がある。具体的には、デューイは、アメリカ人が、国民主権を放棄し、自分たちの問題を国際的な立法に委ねることを提唱する。また、単なる平和の主張を消極的な概念として批判し、「自分の体を傷つせず、その財産を無傷で保つよりも重要な」積極的理念こそが守るに値するものであると論じる。それは、「人類の共存を目指す偉大な実験における実り多い共同の諸過程」であり、その中に含まれている「階級・人種・地理的条件・国家などの障壁を取り払って、真の有効な人類の交わりを推進するという理念」である。そして、デューイはその可能性を、アメリカの「哲学」に託すのである。⁽²¹⁾

こうしたデューイのドイツ文化批判は、きわめて粗雑な議論に見える。第一に指摘すべきことは、確かにカントの哲学が二元論的な特徴を持ち、それがドイツの哲学の基調をなしたことは事実であるとしても、個別の教説ではなく、「ドイツ哲学」なるものを総体としてとらえて議論することにどれほどの意味があるのかという問題である。ここでのデューイの議論は、「ドイツ哲学」なる総体が存在することを前提とし、そこに恣意的な要素を組み込むことで、それを批判する自らの議論を組み立てているように思えるのである。⁽²²⁾ 第二の問題は、デューイが、こうした「ドイツ哲学」の特徴を、ドイツ国民一般の政治的・心理的な態度に直結させて論じている点である。確かに、ベルンハルディにはドイツ観念論のある種の特徴が濃厚に見受けられるにしても、そこから自動的にある国民的な心理的態度を帰結するという議論は、印象論的な分析であるにしても、いささか強引に過ぎる。まして、この議論

を行っているのが、ドイツの哲学になじみのない論者ではなく、一九世紀後半以来、「形而上学クラブ」のメンバーとしてドイツ観念論の摂取に努めてきたデューイである⁽²³⁾ことを考えると、こうした議論の粗さはますます奇異に思える。

もちろん、こうした疑問を解消する鍵をデューイが提供していないわけではない。たとえば、『ドイツ哲学と政治』では、その冒頭に、観念が人間の具体的な行動に及ぼす影響についての一般論がおかれている。その中でデューイは、次のように論じている。「そもそも私には、純理論的なレベルにとどまる諸観念や思想が、人間の行動に何らかの影響を与えたとは信じがたい。……しかし、そもそも私には、現実を超越した純然たる観念や純粹なる理性なるものが存在しようとは信じられない。現存する思想は例外なく、世界に対して向けられた一つの意思表示、我々にとって所与の現実的状况に対する一つの態度表明といわねばならないのである。これらの意思表示ないし態度表明のほとんどは、しかしながら短命である⁽²⁴⁾」。ここでデューイは、現実の状況を離れた哲学という理念そのものを否定し、哲学を現実に対する「態度表明」として理解している。そして、こうした態度表明は、具体的な状況に依存しているが故に、短期的なものであるが、しかし、すべての哲学がそうであるわけではない。「一切の観念が、つかの間の反応しか得られず死滅するというわけではない。……公的・私的教育は、他の人間の精神内部というよりは、むしろ永続的な行為の傾向の中に諸観念を具体化する。教育によって体化された諸観念は、行為に持続性を与える⁽²⁵⁾」。ここで、デューイが指摘しているのは、哲学と教育のある結びつきであり、それによって哲学的な諸観念は具体的な行為に対して持続的な影響を与えることになるのである。

このようにしてみると、『ドイツ哲学と政治』におけるデューイのドイツ哲学あるいはドイツ文化批判を、参戦問題をめぐる時事的な思潮にあわせた複雑な議論と理解するのは、早計であることがわかる。むしろ、ここで用い

られている「哲学」・「教育」・「科学」・「民主主義」といった観念は、一九一五年以前のデューイの哲学・倫理学・教育学における理論的な発展を前提にして、初めてその意味を理解することができないものではないだろうか。⁽²⁶⁾ それでは、デューイがここで「哲学」という言葉で表現しようとしたものは何であり、それは教育とどのように結合しており、また政治といかなる関係を持つていたのであるうか。以下では、一九〇〇年代から一九一五年に至る時期のデューイの思想的展開をたどり直すことによってデューイのドイツ批判の意味を読み解くことを試みる。

4 「経験」・「科学」・「哲学」

一九〇四年にシカゴ大学を辞して、コロンビア大学で新たな活動を始めることになったジョン・デューイが、まず力を注いだのは、認識論をめぐる論争である。この論争の中で、デューイのプラグマティズムは、明確な形をとって表明されていくことになる。以下では、この認識論をめぐる論争を簡単に整理し、デューイのプラグマティズムの意味を考察する。⁽²⁷⁾

一九世紀のアメリカ哲学を支配した観念論的認識論は、一九世紀末には徐々に批判の対象となり始めた。観念論に対する批判の中心となったのは、新实在論とプラグマティズムである。プラグマティズムの嚆矢となったのは、一八九八年にカリフォルニア大学でウィリアム・ジェームズが行った講演「哲学的概念と実践的帰結」であり、観念論に対する实在論からの批判は、一九〇二年にラルフ・B・ペリーとウィリアム・P・モンタギューが相次いで発表したジョサイア・ロイスに対する批判に始まる。⁽²⁸⁾ 両者と観念論との間の論争は、二〇世紀初頭のアメリカの哲学的風景の中心であった。

實在論による觀念論批判の中心は、対象の實在を条件付ける創造的な過程という觀念論的な知識概念そのものにあった。すべての知られうる対象が、知覚者の意識のうちにあるとすれば、「知る」という行為によって知られている対象にどのような違いが付け加えられるのかを知るのは困難である。觀念論者は、この困難を、すべての対象がその存在について意識に依存していることから推論しようとする。しかし、實在論者にいわせれば、これは対象の意識における現前と外的實在の存在を、前者が後者を規定しているという依存的な関係と誤認しているのであり、結局のところ、「知られている対象は知られている対象」であるというトートロジーを帰結しているに過ぎない。知覚者の意識の内部と外部に同時に対象は存在しうるのである。この批判は、觀念論を否定するものではないが、しかし、多くの觀念論の議論に疑問を差し挟む可能性を開くものであった。さらに實在論者は、意識と独立に存在し、それに関する知識によってその存在が変化しないのみならず、何らかの方法でその存在を確認することができる対象の例を示しうると主張する。その一つとして實在論者が好んで取り上げたのは、いわゆる「錯視」現象の存在である。地平線で交わっているように見える線路は、「交わっている」ように知覚されるけれども、実際には平行である。觀念論的な意味で意識が構成した像としての「線路」とは異なる、線路が存在しており、しかもそれは経験的な方法で確認することが可能なのである。

こうした觀念論と實在論の対立に対して、両者はいずれも「認識論という疑似領域」にとらわれているとして、批判する立場に立ったのがデューイらの唱えたプラグマティズムであった。⁽²⁹⁾デューイは、一七世紀以来の哲学の中心を「認識論」と規定したが、それは一時的で不完全な日常世界の事物に結びつけられた単なる「信念」ではなく、客観的で普遍的かつ完全な「真の現実 (the Reality)」についての知識を得るための試みであった。近代哲学は、その関心の大部分を認識論に集中したが、それがもたらした結果をデューイは、次のように要約している。す

なわち、「近代の認識論的な哲学は、それが約束した現実を提供できなかっただけではなく、日常の信念を軽蔑し、否定することにより、『科学』という現実世界を知るために人類が発達させたもつとも信頼できる手段を哲学から切り離すことになった」⁽³⁰⁾のである。デューイが認識論の失敗の大きな原因としてあげているのは、認識しようとしている対象の世界と認識主体が切り離しうるという「認識事象」としての経験のとらえ方にあった。観念論と實在論が共有しているこの「経験」概念に対して、デューイが主張するのは、「直接的経験主義」とデューイが呼ぶ「経験」の新しい理解である。デューイの「経験」は、単なる「認識事象」ではなく、「生物とその物理的・社会的環境との相互関係」であり、そこでは、生物は「認識主体ではなく、動作主体／作用対象であり、行為者であり、害を受けるものであり、快を感じるものである」⁽³¹⁾。デューイは、このように経験を規定することで、「知ることが経験の唯一の真正な様式である」という認識論の前提を打破しようと試みたのである。

この新しい「経験」概念の根拠としてデューイがあげるのは、経験が生物とその環境との相互作用であることを確立した進化論的生物学である。この相互作用としての経験という過程において、環境の自然のエネルギーは、有機体の生命活動を時に拡大し、時にはそれと対立することになる。しかし、この未知環境との遭遇と調整は単なる受動的な過程ではなく、環境に対する積極的な介入を意味している。経験の動作主体／作用対象は、「前向きに生きている」。なぜなら、調整は将来に目を向けることを必要とする持続的な過程であるからである。この観点によれば、「成功と失敗は、生の基本的なカテゴリーである。善を達成し、悪を回避することは、その最高の利益である」⁽³²⁾ことになる。

こうした「経験」概念の変容によって「知識」は新たな位置づけを獲得する。「知識の獲得あるいは探求は、自然的な進化の過程に出現した、人間の適応の重要な要素である」とデューイは主張する。それでは、どのような意

味で「知識」が人間の適応の重要な要素になるのであろうか。デューイは、「直接的な物理的条件に対する奉仕から、脳が有機体を解放したこと、遠く離れていて、常に拡大し続けている目標に対するエネルギーの解放を可能にしたこと、これらは重要な事実である」⁽³³⁾ことを認めるが、しかしそのことは、思考が人間の行動を離れた独自の領域を作り出したわけではないと考える。つまり、脳は、依然として「行動の有機的装置」の一部なのである。であるとすれば、「知識」は、行動と切り離された意味を持つことはできない。むしろ、知ることは、行為を導く判断をする能力を媒介する機能である。「知識」を獲得することの意味は、「それに基づく推論が可能になることで、与えられた事実から未だ現前していないものを導き出すこと、所与の状況を、未だ与えられていないものの予兆としてみることが可能になる点にある。それによって、人間は、将来の状況に対するコントロール能力を体系的に拡大することができ」⁽³⁴⁾ようになり、効果的に状況に対処しうるかどうか、すなわち、環境の変化に適応できるかどうかに影響を与えるのである。したがって、未発生的事象に対して、人間がどの程度うまく適応できるかは、その主体の持つ「知識」と、それに基づく効率的な探求がなしうるかどうか、大きく依存しているのである。

こうした知識の位置づけの変化は、その知識を扱う「哲学」という分野の意味づけの変化をもたらす。デューイにおける「哲学」の概念は、「科学」概念との対比によって理解することができる。デューイのプラグマティズムにおいて、「科学」という概念はきわめて重要な意味を持つている。しかし、デューイの「科学」は、具体的な個別の自然科学の諸分野で蓄積されている知識のことを必ずしも意味してはいない。デューイにおける「科学」の焦点は、むしろ方法的な態度にある。「我々の態度が科学的であるかどうかは、すべての判断が以下の二つの基準をどの程度満たしているかによって決まる。一つは、他のより確からしい判断を作り出す可能性と比較・対照することによって、その妥当性をチェックし、テストすることである。もう一つの基準は、その意味（または意義）を他

の言明を導出する際の働きによって確定することである⁽³⁵⁾。デューイは、科学的な思考法を、信念を固定化する場合に用いられる日常的な思考の過程を洗練したものであるととらえていた。「科学は、反省的な思考という日常的方法の純化であり、強化である」。デューイの理解によれば、日常的な反省的思考とは、次のようなステップで行われる。(1)困難または問題の感受、(2)困難の特定、(3)問題に対する可能な解決策の提示、(4)提示された解決の妥当性に関する合理的評価、(5)提示された解決の受容または否定に至るためのさらなる観察と実験、の五段階である⁽³⁶⁾。このような思考の過程は、しかし、常に確実なものではない。そこには、各段階において「確実に知られているものから証拠に基づいて受容しうるものへの飛躍⁽³⁷⁾」が存在している。そして、この飛躍は、「過去の経験、受容されたドグマ、自己利益の感情、情念の沸騰、単なる精神的怠惰⁽³⁸⁾」などの様々なものの影響を受けて誤った結論を導く可能性がある。「科学」は、このような飛躍の際に偏向を与える要因を排除することで、よりよい思考を補助するための方法である。

このデューイの「科学」概念は、きわめて幅の広い概念であり、それ故、人間の思考のあらゆる側面に見いだすことができる。「科学的な方法は、あれこれの難解な主題を純粹に技術的な理由から追及するときに役立つことがわかっている方法というだけではない。それは、いかなる主題についてであれ、我々が実りある思考をするときの唯一の方法を示している。これが、我々がそれを科学的というときに意味していることである⁽³⁹⁾」。したがって、この「科学」的な方法は、人間の行為に対しても同様に適用しうる。「倫理」的な判断も、「科学」的な探求の対象になるのは、まさにそのためである。「真理のプラグマティズム的な観念が何らかのプラグマティックな価値を持っているとすれば、それは真理の実験的観念を指示していることを表しているからである。この観念は、技術的な観点からみた科学を支配しているだけでなく、人間的な観点からみた政治的かつ道徳的な実践をも支配しているのだ

ある⁽⁴⁰⁾」。

デューイによれば、認知的な判断と道德的な判断との間に方法論的な違いはない。すなわち両者ともに科学的方法によって、探求しうるものである。両者の間に存在するのは、単に判断の対象の違いである。しかし、対象の違いは、そこで用いられる科学的な判断の論理に大きな影響を及ぼす。倫理的な判断の大きな特徴は、判断主体の「性格」(character) が、判断に影響を及ぼすことであるとデューイは指摘する⁽⁴¹⁾。道德的な判断は、「判断される状況と、判断をするという行動の中で表明される性格や性向との、完全に相互的な決定をもたらす⁽⁴²⁾」。よりよいものあるいはより悪いものを評価する倫理的な判断は、ある程度「性格」によって決定されるのであり、逆に、「性格」は、倫理的な判断とその結果とられる行動によって形成される。ある人が、どのような存在であるか、あるいは、ありたいかという問題は、何をなすべきかという判断に大きな影響を与えるのである。したがって、「科学」的な推論は、自分が望む生き方をするためには何をすべきかを決定し、そのような生き方にとつて、もつともふさわしい目的と適切な方法は何かを選択する場合には、大きな意味を持っている。しかし、どのような生き方をしたいのかという問題については、「科学」はいかなる決定的な判断もなしえない。これは、「科学的な知性」(scientific intelligence) の働きではなく、「道德的な想像力」(moral imagination) の働きである⁽⁴³⁾。「哲学」(philosophy) が、「科学」とは異なる固有の意味を持つのはこの「道德的な想像力」との関わりにおいてである。

デューイによれば、「哲学」はいかなる意味でも知識の一形態ではない。「哲学」は、「行為に際しての欲望や努力の形態、つまり、賢慮(wisdom)への愛」なのである。「賢慮」は、「事実や真理についての体系的で証明された知識ではなく、道德的な価値についての確信(confidence)、自分が送るべきよりよい生についての感覚」である。歴史的にみても、「哲学」は「現実の無色な知的読解ではなく、人間のもつとも情熱的な希望と欲望を体现し

たものであり、どのような生を生きるかに関する彼らの基本的な信念を體現したものである⁽⁴⁴⁾。哲学は、各個人の持つ「あるべき生き方」を示す役割を担っている。「彼らは、科学からではなく、確実な知識からでもなく、道徳的な確信から出発し、その事態に利用可能な最高の知識と最高の知的方法に訴えて、何が本質的な意志の態度であるかを示す形式を与える。つまり、ある生き方を他の生き方よりも優れたものと評価する道徳的な解決法を示し、他の人々にこれが生きるための賢明な方法であることを説得することである⁽⁴⁵⁾」。このように、「哲学」が「賢慮」であって「知識」ではないことは、「哲学」が状況依存的であることを意味する。つまり、「哲学」はある特定の文化的な状況に必然的に影響を受けざるを得ないのである。したがって、「国民的な哲学」(national philosophy)は存在しうるが、国民的な科学(national science)は存在しえない。「哲学」における文化的な差異は、「気質や予期に関する差異を反映している。それは、生を構成する異なる方法」を生み出すのである⁽⁴⁶⁾。

しかし、「賢慮」としての「哲学」が、「いかなる生を生きるか」という個人の価値判断の反映であり、道徳的な確信の表明に過ぎないとすれば、それは主観的かつ恣意的な表明に過ぎないのではないだろうか。デューイは、この疑問に、次のように答える。「哲学は、確立された真理と見なされたものの中から有意義な材料を選択するという形でのみ、その価値判断を知的な形で提案できる。そして、現在の知識を、その生のご概念の妥当性を納得させるために用いることができる。この論理的な提示法と科学的な主題への依存が、哲学に知識としての外見(形式ではない)を与えるのである。つまり、哲学は、単なる情熱ではなく、合理的な説得として自らを提示する情熱なのである⁽⁴⁷⁾」。哲学は、単なる個人的な気質の表明や個人的な確信の表明ではない。それは、そうした主観的な確信の客観的な表明であり、そうした正当化のためには論理と科学という、他の知識と同様の方法が用いられる。「哲学」とは、いわば合理化された「生」の提示であり、必然的に「説得」という形態をとることになる。

5 「デモクラシー」

こうした「哲学」によって実現される「自己」とはどのようなものであろうか。前述したように、道徳的な判断には、その判断主体の「性格」が大きな影響を与える。それは、そうした判断の基準となる幸福 (happiness) そのものが「性格」によって大きく規定されているからである。こうして、功利主義とは異なり、幸福は単に量的に積算されるものではなく、個人の性格によって「質的に異なる」ものになる。⁽⁴⁸⁾ さらに、デューイは、こうした幸福の質の中で、正しいものと正しくないものの、真の幸福とそうでないものを区別することが可能であるという。真に幸福な行為主体は、自己のすべての力と利益とを統合した目的を欲求するような性格を発展させ、それを表現するた⁽⁴⁹⁾めに行動する。「我々は、誤ったまたは不満足な幸福と、真のあるいは真正の善とを区別することができる。前者は、多かれ少なかれ、孤立して表面的な個人の傾向に現れるものであり、後者は、基本的に完全に関連づけられた能力の適切な充足によって得られるものである」⁽⁵⁰⁾。したがって、「調和、強化、拡大は、道徳的な充足を示すものである」⁽⁵⁰⁾。

道徳的な幸福と「調和」の観念が結びつけられていることは、デューイの幸福概念における社会的な次元の存在を示唆する。実際、「社会的な善」、すなわち、ある行為によって影響を受けるすべての人の福利こそが、すべての人の幸福の基準と両立しうる目的となることができる。「我々は、ある程度社会的な存在であるということことを無視して、自分たちのことを考えることはできない。それ故、我々は、自分自身という観念や自分たちの利益という観念と、他者という観念あるいは他者の善という観念を分離することはできないのである」。逆にいえば、利己的な

行為は、自己の利益を優先するから道徳的に問題であるのではない。「その利益が狭く限定されたものとなる」とが問題なのである。こうして、道徳的な観点から見た望ましい自己とは、「自己のすべての能力と習慣を、社会的な観点から考慮する習慣を形成し、実現しているもの」である⁽⁵¹⁾。こうした、「幸福」の社会的な次元の実現を導くのは、人間の持つ共感の傾向である。こうした共感の傾向が、能力と欲望の調和と拡大を一つの協調的な全体へとまとめ上げることを可能にする。この共感と自己の持つ他の能力や欲望との融合こそが、道徳的な生活の目的である⁽⁵²⁾。道徳的な生活は、自己創造の過程であり、「共感的性格」の成長の過程である。倫理的な理念としての自己実現は、「自然的な自己」を構成する始原的かつ本能的な衝動に満ちた肉体から生じる、自発的な自己の形成である。ここでは、社会化された欲望と感情が支配的となり、熟慮の最終的な統制原則は、対象への愛となる。そして、そのことがこの転換を可能にするのである⁽⁵³⁾。こうして、デューイにおける道徳的な理想としての自己は、その追求する目的の如何を問わず、自己の持つ力と能力を内的に統合し、外的には他者との間に共感に基づく共同関係を構成する存在である。

こうしたデューイの個人観は、それらの集合体としての社会観にも反映する。デューイは、社会の理想像を「道徳的デモクラシー」(moral democracy)と名付けるが、それは、個々の行動を導く倫理的な基準の総体である。善い社会は、善い個人と同様、多様であるがしかし調和的であり、成長しつつも統一された全体であり、それを構成する個人の力と能力とが協調的な行為によって結合されており、その内部で個性の完全かつ自由な表現が可能なコミュニティである。こうした社会が形成され、維持されるのは、前述の個人観の必然的な帰結である⁽⁵⁴⁾。「善とは、すべての人が参加し、各自の力が引き出され、利用され、再強化される活動である」⁽⁵⁴⁾。したがって、善い行為主体は、同時に、善い民主主義者となる。「道徳的デモクラシー」の観点から規制された社会的な善を目的として

行動することは、自分の行為の結果に影響を受けるすべての人の幸福の観点から行動することに等しい。ここでは、他者の自由が、自己の行動の適切な対象を規定するという意味で、自己の自由と結合している。「道徳的デモクラシー」の下では、他者が自発的に選択する力を自由に行使できるような条件と対象を保持できるように、各自が行動しなければならない。

こうした行動を実践することは、現実にはきわめて困難であり、したがって、しばしばデモクラシーの理念に対する違背が生じる。そうした違背の中でも、もつともデューイが厳しく非難するのは、「パターナリスティックな慈善」の精神である。それは「他人のために」行う善であって、「他人とともに」行う善ではない。⁽⁵⁵⁾つまり、「道徳的デモクラシー」においては、単に価値のある目的が追求されるだけでなく、その追求が自由かつ協調的な参加によって実現されなくてはならない。幸福とは行動によってもたらされるものであって、ある人が他の人に与えることができるものではない。「この幸福の原則から逃れたり、避けたりする方法はない。なぜなら、それは自発的な行動主体の行為能力の行使のうちにあるからである。それ故、共同の幸福の原則から逃れたり、避けたりする方法はない。それは、すべての関係者の自発的な行動の調和的な行使のうちにあるからである」。⁽⁵⁶⁾それ故、デューイは、「道徳的デモクラシー」において、個人が積極的意味と同時に消極的な意味でも自由でなくてはならないと主張する。消極的な意味の自由、すなわち制約からの自由は、「有効な自由」(efficient freedom)の不可欠の条件である。「有効な自由」とは、自己の能力を最大限に発揮する機会のことであり、「目的をもたすために必要な資源の積極的なコントロールと、欲望を満たすための手段の所持、そして、自由な選好と長期的な視野に立った欲望のために必要となる訓練された自発性と反省の能力という精神的な力」⁽⁵⁷⁾を意味する。これらを保障することが、「道徳的デモクラシー」における個人の「生の理想」の自由な実現につながるとデューイは主張する。

しかし、この「有効な自由」の実現のためには、消極的な自由だけでは十分ではない。真の自由を実現するためには、その実現のための手段が必要であるということをこの概念は意味している。デューイは、「外在的な解放からの単なる解放による行為主体の自由は形式的で空虚である」として、そうした消極的な意味の自由を主体的にコントロールする能力を個人が持つことが、自由の実現の不可欠の条件であるとする。⁽⁵⁸⁾ そうした条件のないところでは、「その人は不可避免的に自分自身を他者の目的や観念の実現のために差し出さなくてはならないことになる。熟慮と発明の能力がなければ、彼は自分の考え方を気軽に取り上げ、環境からの提案を表面的に受け止め、精神に吹き込まれたある階級の利益の観念に占有されてしまうであろう」⁽⁵⁹⁾。

この「有効な自由」の概念をデューイは「機会の平等」(equality of opportunity) という概念に結びつける。ここで「機会の平等」とデューイが呼んでいるのは、社会の全構成員に対して自己実現の手段を提供することである。すべての人が同じ資源を持つ必要はないけれども、すべての人がその必要とするものを持つべきであるとデューイは主張する。デューイは、「機会の平等」によって、すべての人が単一の競争に参加するために同じ機会を与えられることを意味してはいない。むしろ、「機会の平等」は、すべての人がそれぞれの目的を追求するという機会を平等に与えられるべきである、という主張であって、追求される目的そのものは多様なものであり得る。そして、そうした多様な目的を追求するための手段や能力もまた多様なものであり得る。したがって、社会はそれらを多様な目的を追求するために必要な手段や能力を平等に各個人に配分すべきなのである。⁽⁶⁰⁾ つまり、デューイにおける機会の平等は、自由な個性の追求と発展を促進するものである。

こうした「有効な自由」を実現するために、「哲学」は実践の場を必要とする。その実践の場として、デューイが選択したのは教育である。「近代社会においては、学校が哲学を『生きた現実』に転化する決定的な場」である

からである。⁽⁶¹⁾では、そうした「哲学」の理念を実現するために、学校において教授されるべき内容とは何であろうか。

この点に関して、デューイが強調するのは、科学的な思考方法の鍛錬である。前述したように、デューイにとって、科学的な判断は、日常的な反省を洗練したものに過ぎない。したがって、「損なわれていない子供本来の態度すなわち、強い好奇心、豊かな想像力、実験的な探求への愛、こうした態度は、科学的な精神態度の近く、ほんのすぐ近くにある」⁽⁶²⁾のであるから、子どもに科学的な思考方法を教えることは決して困難ではない。前述したように、デューイにおける科学的な思考方法は、自然だけではなく、人間の行動をもその対象としうる。そして、自己の持つ「生の理想」に対して適切に調整された手段を実現することが、人間の環境に対する適応の本質的な部分となすとなれば、科学的な思考は、そうした適応としての自己実現、すなわち「有効な自由」の実現のために不可欠である。「科学的な精神への直感なしでは、有効に方向付けられた省察を行うために、人間が得た最良のツールを所持していないことになってしまう」⁽⁶³⁾。

さらに、科学的な思考方法は、その使用を通して、共同体が所持している特定の認知的価値に対する参加をもたらす。自由な探求、多様な意見の慣用、自由なコミュニケーションは、科学的な探求の必要条件であると同時に、民主的な社会と政治の必要条件である。したがって、科学は、有効な思考の方法を提供するだけでなく、知性の「社会化」を実現する集団の形成を促す。⁽⁶⁴⁾こうして、科学的な思考は、本質的に社会的なものである。学校はそれ自体が小さな科学的共同体であるように組織されなくてはならない。子供たちは、継続中の実験に参加し、他の参加者と意見を交換し、自分自身の意見を修正し、そうする中で、自分自身を協働的な共同体の一員として構成していくのである。

しかし、デューイは単なる技術的な意味における「科学」の重要性を強調するにとどまらない。デューイは、教育における科学的な道徳的判断力の必要性に大きな注意を払う。学校における科学的な思考法の教育が、民主的な共同体にふさわしい心的な態度を形成するとともに、最終的には熟慮された実践的な判断力の養成に結びつけられていなければならないと主張する。それは、単なる科学の領域を超えて、「哲学」の領域に接近する。「科学は、最も簡単かつ効率的にそれをなすにはどうすればよいかを語るだけでなく、何をなすのかを語らねばならない」。⁽⁶⁵⁾したがって、デューイの教育論の中でもっとも重点が置かれるのは、科学ではなく歴史である。歴史こそが、「道徳的教育の最も有効な意識的道具」であるからである。歴史は、子供たちに「社会生活の価値を評価し、人間の有効な協力による力を想像させ、そうした協力を生み出す性質を理解させることを可能にする」⁽⁶⁶⁾のである。

こうしてデューイの教育論は、「賢慮としての哲学」の概念を通して、個人の「生の理想」とデモクラシーとを結合する。デューイは、民主社会の原則を、教育の場に持ち込むことによって、子供の民主的な傾向を促進し、よい民主主義者を育て上げることが可能になると考える。子供たちがいかに考えるかを教える場合と同様、自らの目的を、誰かに強制されるのではなく、自分自身の性向に合わせた方向に主体的に構成していくことが求められる。⁽⁶⁷⁾それによって、子どもは、自らの「生の理想」を自ら確立し、それを追求することができるようになるのである。こうした民主主義的な性向を育てるために、デューイが最良の方法と考えたのは、学校の子供たちを最初から社会生活の中におくことであり、「協同的生活様式」という民主社会に特徴的な形式の中で育てることである。完全な参加の共同体と「コミュニケーションされた統合経験」の中で、社会的な共感と熟慮された道徳的な理性が発展していくのである。⁽⁶⁸⁾

6 おわりに

デューイの参戦論の一つの特質をなすドイツ批判の論理は、コロンビア大学に移動して以降のデューイの思想のいわば集大成としての性格を持っている。それは、デューイの思想的な発展がもたらした必然的な帰結であるといつてもよいであろう。

デューイが、「ドイツ哲学」を否定するとき、そこで意味されている哲学は認識論あるいは形而上学としての哲学ではない。それは、生の構想を示すものとしての「哲学」なのである。デューイが指摘するように、こうした「哲学」の営みは、単に自らの理想とする生き方を示すのではなく、それらを適切な形式と手続きによって提示しなければならぬ。それ故、「哲学」には、常に二つの危険が付きまとう。一つは、そうした形式を満たすことを重視するあまり、厳密な形式のみが実現されて、内容が空疎に帰してしまう可能性である。カントの二元論的な哲学が示しているのは、厳密な形式的哲学に支えられた、空疎な実践哲学としての「哲学」の姿である。もう一つの危険は、形式があまりに軽視されて、内容が単なる自己の願望の提示になってしまう危険性である。カントの二元論哲学は、内容と形式を切り離すことによって、形式にとらわれない内容の自由な読み込みを許す結果をも生んだ。ヘーゲル以降のドイツ哲学がたどった道は、このルートであることになる。⁽⁶⁹⁾

しかし、デューイの「哲学」は、各個人の目的の多様性に基礎づけられたデモクラシーを理想としているのではなかったか。そうであるとすれば、ドイツ哲学的な文化・教育環境の中で成長した人々が持つ価値観は、なぜそうした多様な目的の一つとして寛容の対象にならないのであろうか。デューイの個人観を検討すればわかるように、

デューイの共同体において各人が追求する独自の生は、しかし、それが他の人々の生との間で統合されている限りにおいて、寛容されるのである。各個人の追求する生は、通約不能なものとして、価値的序列を逃れたところに存在する。むしろ重要なのは、「生の形式」としてのデモクラシーの原則が満たされているかどうかであり、その意味で言えば、デモクラシーの原則を満たすことが本質的に不可能な生の理想に対しては、デューイのデモクラシーは不寛容なのである。ドイツ哲学が生み出す「生の形式」は、個人の自発的な共同体への参加を否定し、他者との関係を個人の生の外部に押しやる点で、デューイのデモクラシーの原則とは相容れない。それ故、ドイツ的な「生の形式」の中で養われる生の理想は、いかなるものであれ、それはデューイにとって容認することができないものとなる。

しかし、デモクラシーという特定の「生の形式」が正当なものとして価値の基準になるのは、ある特定の共同体の中だけではないのであろうか。デューイが認めているように、プラグマティズムはアメリカの哲学である以上、デモクラシーという「生の形式」が正当性を持つのは、アメリカという特定の文化的共同体の中に限定されるのではないであろうか。⁽⁷⁾ そうであるとすれば、異なる文化的な価値観の元にある社会に、デモクラシーという「生の形式」の判断基準を適用することは、それ自体デューイの哲学の前提に反することになるのではないだろうか。

「ドイツ哲学と政治」でデューイが行った最大の「飛躍」は、この文化的な制約に関する議論であらう。アメリカの哲学とアメリカの文化的価値を無条件に拡大することは、デューイの哲学からは自動的に正当化し得ないはずである。⁽⁸⁾ これが、デューイの参戦論に対する批判、とりわけ、プラグマティズムをもっともよく理解している人々からの批判を生み出した大きな原因であらう。一九一五年以前のデューイは、もっぱらアメリカの哲学としてのプラグマティズムの建設に傾注するあまり、プラグマティズムそのものの持つ文化的被規定性に対して、強い関心を

寄せていたとは思われない。それは、しばしばデモクラシーの文化内でのみ成り立つはずの諸帰結が、あたかも普遍的に適用可能であるかのように議論されることから看取することができる。欧州大戦がジョン・デューイにもたらしたものは、こうしたプラグマティズムの文化依存性の再認識であったということもできるだろう。一九二〇年代に入つて、デューイが相次いで理論的な著作を出版するのも、そうした文脈の中で理解すべきであるかもしれない。文化的被規定性の認識の上に展開した一九二〇年代のデューイのプラグマティズムと政治・社会思想については、稿を改めて検討してみたい。

*本論文は、科学研究費基盤研究(C)「第一次世界大戦への参戦問題を契機とするアメリカの改革派知識人の分裂とその意義」(課題番号 17530113、平成十七〜十八年度)による研究成果の一部である。

(1) 欧州大戦の参戦問題をめぐる論考は、膨大にある。本稿は、主として以下の議論に関係する範囲内でのみしか、それらの資料を参照していない。その意味で、ここで記述されるのは、参戦問題をめぐるアメリカの知的世界の「一風景」であつて、決してその全体像ではない。

(2) 欧州大戦が革新主義的な知識人に与えた影響については、Forcey (1961)、Hirschfeld (1963) および Rochester (1977) が古典的な研究である。

(3) デューイの政治的立場は本来『ニュー・リパブリック』誌の編者たちとはかなり異なる。例えば、『ニュー・リパブリック』誌の編者たちが革新党の支持に回つた一九二二年の大統領選挙では、デューイは社会主義者であるユージン・デブスに投票している。こうした政治的傾向の大きく異なる知識人間に協力関係が成立したことは、革新主義運動の幅の広さを物語ると同時に、革新主義という言葉の曖昧さをも反映している。実際、デューイを革新主義者と規定することに、どれだけの意味があるのかは判然としない。革新主義の多様な意味とその中のデューイの位置については、Westbrook (1991), pp. 182-194 の整理が有用である。

- (4) 「世代越えた連合」は、ウェストブルックの用語である。Westbrook (1991), p. 197.
- (5) これは、デューイの意図しなかった結果というわけではない。デューイは「公共的知識人」(public intellectuals)としての役割を積極的に果たすことを自らの役割と考えていたし、ボーンを始めとする周囲の人々も、そうしたデューイの行動に一種の期待を持っていた。そうした期待を明確に表すものとして、Bourne (1915 = 1977) をあげることができよう。
- (6) 前注のようにボーンは、自らが期待した公共的知識人としてのデューイに大いに期待をかけていたのであり、それゆえデューイが展開した参戦容認論に対する幻滅も大きかった。Bourne (1917a = 1977) ʹ Bourne (1917b = 1977) を参照。
- (7) Bourne (1917a = 1977), pp. 343-345.
- (8) 批判的な評価の代表としてはLasch (1965) をあげることができるであろう。逆に、好意的に評価しているものとしては、Westbrook (1991) ʹ Ryan (1995) ʹ Bullert (1983) などが挙げられる。
- (9) 「戦時リベラル」は、ヒュラートの用語である。Bullert (1983), p. 45. なお、欧州大戦期および大戦後のニュー・リパブリック誌の動向に関しては、Levy (1985) およびSeideman (1986) を参照。
- (10) Angel (1915) を参照。
- (11) ヨーロッパ大陸における戦局の展開とニュー・リパブリック誌の論調の変化に関しては、Bullert (1983), pp. 49-60 が概略を提示している。
- (12) Dewey (1916a) およびDewey (1916b) を参照。ここでデューイは、目的を実現するために必要な力の行使である“Force”と、目的の実現に不適切な力の行使である“Violence”を区別した上で、戦争がもたらす具体的な結果に基づいて、その戦争に用いられた力の種類、ひいては、戦争そのものの正当性を判断すべきであると論じている。
- (13) 戦争が、プラグマティズムの適用されるもつとも典型的な場合であり、それゆえプラグマティズムの有効性の重要な試金石となるという理解は、同時代にも存在した。もつとも典型的なものとして、Bourne (1915) を参照。
- (14) デューイの平和主義批判に関しては、Dewey (1916b) およびDewey (1917a) を参照。
- (15) これらの活動とその解釈に関しては、Ryan (1995), pp. 197-198 が説得的である。
- (16) デューイの欧州大戦をめぐる議論をどのように解釈すべきであるかについては、これまでもさまざまな議論がある。Westbrook (1991), p. 196, n. 2 は「これらの論争についての明晰な見取り図を示している。

- (17) Dewey (1915) を参照。
- (18) Dewey (1915), Chap. 1, pp. 140-162. なお、この部分および以下の要約にあたっては、Westbrook (1991), pp. 197-202 および Ryan (1995), pp. 191-192 を参考に行っている。
- (19) Dewey (1915), Chap. 2, pp. 162-184.
- (20) Dewey (1915), Chap. 3, pp. 184-200.
- (21) Dewey (1915a), pp. 200-205.
- (22) この時期のデューイは、他にもドイツ哲学に対する論考を執筆している。それらは、『ドイツ哲学と政治』に比較すると、はるかに短い文章であるが、その本質的な特徴は共通している。Dewey (1915b) / Dewey (1916c) を参照。
- (23) ハーバード大学の卒業生を中心とするドイツ観念論の初期的な受容に関しては、Menand (2001) を参照。後述するように、認識論的には観念論から距離を置くようになったとはいえ、デューイのドイツ哲学自体への関心は、この時期も衰えてはいないと考えられる。例えば、Dewey (1916c) でこのニーチェに対する肯定的な評価は、この時期のアメリカではかなり異例のものであり、デューイの深い見識がうかがえる。デューイのニーチェ理解の問題、および、この時期のもう一つのデューイと観念論のつながりを媒介するヘルグソン理解の問題は、今後の検討を要する、興味深い問題である。
- (24) Dewey (1915a), p. 142.
- (25) Dewey (1915a), p. 143.
- (26) このような推測のもう一つの根拠は、デューイ自身にある。一九二〇年代に入って、デューイは多くの哲学的な著作を著したにもかかわらず、デューイ自身は、この時期（一九一六年）に書かれた『民主主義と教育』を持って、自己の哲学的な立場をもっともよく表現したものと発言していることである。このことは、デューイ思想における哲学と教育、そしてデモクラシーの三要素の關係の重要性を示していると考えられる。
- (27) 以下の記述については、Westbrook (1991), Chap. 5, pp. 117-149 の整理を参考に行っている。
- (28) James (1898) / Perry (1902) / Montague (1902). また、Menand (2001), Part. 5 を参照。
- (29) 一般にプラグマティズムの歴史を議論する場合に挙げられる三人の確立者、ウィリアム・ジェームズ、チャールズ・S・パーズ、ジョン・デューイの間には、経験による検証という基本的な観念を共有しつつも、さまざまな差異があることが知られてい

る。パースが、混乱を避けるという理由で、「プラグマティズム」という用語の使用を止めるほど、当事者にとってその差異の意識は大きかった。しかし、本稿ではケンブリッジ・プラグマティスト内部の哲学的な差異を分析することが目的ではないので、基本的にデューイの論じるプラグマティズムの観念に基づいて議論を整理してある。

- (30) Westbrook (1991), p. 124.
- (31) Dewey (1905), p. 158.
- (32) Dewey (1917b), pp. 8-10.
- (33) Dewey (1916d), p. 326.
- (34) Dewey (1917b), p. 15.
- (35) Dewey (1903), pp. 3-4.
- (36) Dewey (1910a), pp. 236-237.
- (37) Dewey (1910a), p. 239.
- (38) Dewey (1910a), p. 201.
- (39) Dewey (1910b), p. 78.
- (40) Dewey (1911), p. 31.
- (41) Dewey (1903), pp. 21-22.
- (42) Dewey (1903), pp. 23-24.
- (43) Westbrook (1991), p. 145. デューイ自身が「哲学」との関係で「道徳的想像力」という術語を使用した箇所は、管見の限りでは見あたらない。
- (44) Dewey (1918), p. 44.
- (45) Dewey (1918), p. 44.
- (46) Dewey (1918), p. 43.
- (47) Dewey (1918), p. 46.
- (48) Dewey and Tufts (1908), p. 254.

- (49) Dewey and Tufts (1908), p. 256.
- (50) Dewey and Tufts (1908), p. 259.
- (51) Dewey and Tufts (1908), p. 271.
- (52) Dewey and Tufts (1908), p. 303.
- (53) Dewey and Tufts (1908), p. 357.
- (54) Dewey and Tufts (1908), p. 286.
- (55) Dewey and Tufts (1908), p. 277.
- (56) Ibid.
- (57) Dewey and Tufts (1908), p. 392.
- (58) Ibid.
- (59) Ibid.
- (60) Dewey and Tufts (1908), pp. 487-492.
- (61) Dewey (1912-13), pp. 306-307.
- (62) Dewey (1910a), p. 179.
- (63) Dewey (1916e), p. 197.
- (64) Dewey (1910b), p. 79.
- (65) Dewey (1910b), pp. 78-79.
- (66) Dewey (1909), p. 192.
- (67) Dewey (1916e), p. 41.
- (68) Dewey (1916e), p. 93.
- (69) Dewey (1918), p. 43.
- (70) Dewey (1922), p. 307.
- (71) それゆえ、『ドイツ哲学と政治』におけるアメリカの使命についてのデューイの言明を字義通りに受け止めることは、やや軽

率ではないだろうか。ウェストブルックは、デューイのデモクラシー論の根底に「多民族デモクラシー」の観念があったことを指摘するが、それはあくまでも「アメリカ的観念」に止まるものであり、他の文化的共同体に拡大する論理をデューイは持っていないのではないだろうか。

【文献一覧】

ジョン・デューイの著作・論文に関しては、Jo Ann Boydston (ed.), *The Collected Works of John Dewey, 1882-1953*, Southern Illinois University Press, 1968-1990 所収のものから引用を行った。ただし、筆者が参照したのは、一九九六年に発行された電子版 (Electric Edition) である。その長年にわたる旺盛な執筆活動を反映して、デューイの著作集は三七巻もの量になる。そのため、著作集は、初期著作集 (Early Works 1882-1898)、中期著作集 (Middle Works, 1899-1924)、後期著作集 (Later Works, 1924-1953) に分割して出版されている。本稿の引用も、各期の著作集での巻数・ページ数で表記する。

- Angell, Norman (1915), "A New Kind of War", in *New Republic* (July 31, 1915) pp. 327-329
- Bourne, Randolph (1917a=1977), "Twilight of Idols", in Hansen (1977)
- Bourne, Randolph (1915a=1977), "John Dewey's Philosophy", in Hansen (1977)
- Bourne, Randolph (1915b=1977), "Mental Unpreparedness", in *New Republic* (September 15, 1915), pp. 40-48
- Bourne, Randolph (1917b=1977), "The War and The Intellectuals", in Hansen (1977)
- Bullett, Gary (1983), *The Politics of John Dewey*, Buffalo: Prometheus Books
- Dewey, John (1910b), "Science as Subject-Matter and as Method", *Middle Works*, Vol. 6, pp. 69-79
- Dewey, John (1903), "Logical Condition of Scientific Treatment of Morality", *Middle Works* Vol. 3, pp. 3-40
- Dewey, John (1904), "The Postulate of Immediate Empiricism", *Middle Works* Vol. 3, pp. 159-169
- Dewey, John (1909), "History for the Educator", in *Middle Works* Vol. 4, pp. 192-198
- Dewey, John (1910a), "How We Think", *Middle Works*, Vol. 6, pp. 179-357
- Dewey, John (1911), "The Problem of Truth", *Middle Works*, Vol. 6, pp. 12-68

- Dewey, John (1912-13), "Philosophy Of Education", *Middle Works*, Vol. 7, pp. 297-312
- Dewey, John (1915a), "German Philosophy and Politics", *Middle Works*, Vol. 8, pp. 137-206 (足立幸男訳『ドイツ哲学と政治—ナチズムの思想的淵源』木鐸社、一九七七年、ただし、副題から推察されるように、邦訳は一九四一年に出版された改訂版に依拠しているため、引用は原則として拙訳にて行っている。)
- Dewey, John (1915b), "The Tragedy of German Soul", *Middle Works* Vol. 10, pp. 306-310
- Dewey, John (1915c), "The Logic of Judgments of Practice", *Middle Works* Vol. 8, pp. 14-82
- Dewey, John (1916a), "Force and Coercion", in *Middle Works* Vol. 10, pp. 245-252
- Dewey, John (1916b), "Force, Violence and Law", in *Middle Works* Vol. 10, pp. 212-216
- Dewey, John (1916c), "On Understanding the Mind of Germany", in *Middle Works*, Vol. 10, pp. 217-235 (足立謙『ドイツ哲学と政治』一五五頁〜一八四頁を所収)
- Dewey, John (1916d), "Introduction to Essays in Experimental Logic", in *Middle Works*, Vol. 10, pp. 321-167
- Dewey, John (1916e), "Democracy and Education", in *Middle Works*, Vol. 9, pp. 1-370
- Dewey, John (1917a), "The Future of Pacifism", in *Middle Works*, Vol. 10, pp. 268-271
- Dewey, John (1917b), "The Need for Recovery of Philosophy", in *Middle Works*, Vol. 10, pp. 3-50
- Dewey, John (1918), "Philosophy and Democracy", in *Middle Works*, Vol. 11, pp. 41-54
- Dewey, John (1922), "Pragmatic America", in *Middle Works*, Vol. 13, pp. 306-311
- Dewey, John & Tufts James H. (1908), "Ethics", in *Middle Works* Vol. 5, pp. 1-540
- Forsey, Charles (1961), *The Crossroads of Liberalism*, New York : Oxford University Press
- Hansen, Olaf (ed.) (1977), *The Radical Will : Randolph Bourne Selected Writings*, New York : Urizen
- Hirschfeld (1963), "Nationalist Progressivism and World War I", in *Mid-America* 45, pp. 139-156
- James, William (1898), "The Pragmatic Method", in James (1978), pp. 123-139
- James, William (1978), *Essays in Philosophy*, Cambridge : Harvard University Press
- Lasch, Christopher (1965), *The New Radicalism in America 1889-1963*, New York : Norton

- Levy, David (1985), *Herbert Croly of "the New Republic"*, Princeton : Princeton University Press
- Menand, Louis (2001), *The Metaphysical Club : A Story of Ideas in America*, New York : Farrar, Straus, Giroux
- Montague, William P. (1902), "Professor Royce's Refutation of Realism", in *Philosophical Review*, No. 11, pp. 43-55
- Perry, Ralph Barton (1902), "Professor Royce's Refutation of Realism and Pluralism", in *Monist*, No. 12, pp. 446-458
- Rochester, Stuart (1977), *American Liberal Disillusionment in the Wake of World War I*, University of Pennsylvania State University Press
- Ryan, Alan (1995), *John Dewey and the High Tide of American Liberalism*, New York : Norton
- Seideman, David (1986), *The New Republic : A Voice of Modern Liberalism*, New York : Praeger
- Westbrook, Robert B. (1991), *John Dewey and American Democracy*, Ithaca : Cornell University Press